

希望としてのソーシャルワークー 3・11 以後の社会福祉を問う

ーソーシャルワークが頭かにするものー

研究科 1990 年卒. 山崎 眞弓

社大フォーラム 2010 は派遣村報道など「貧困、格差問題」が注目される最中であった。私は「格差（不平等、相対的貧困）問題の中のソーシャルワークの位置」を発表させて頂いた。そして 1 年後に 3.11 の大震災と福島原発事故が起った。現地からの報告では被災地はあたかも 1970 年代の生活が戻ったような生活基盤の崩壊を体験していると聞く。

### 1. 福祉国家内部のソーシャルワークの動向

1990 年代、福祉国家イギリスでは財政赤字、官僚主義が指摘され、サッチャー政権の福祉国家批判の中で、コミュニティ・ケアは「ソーシャルケア」へと動いた。福祉国家政策推進の中核的位置を占めていたソーシャルワークに対しても、権威主義、生活管理主義、個人領域への支配等が指摘されるなど、政府機関は脱専門職化を提起する。

この中でコミュニティにおける対人社会サービス、福祉サービスの供給について、効率性の目標が設定され、ケアマネージメント技術の導入による、多様な分野、多様なサービスの供給における効率性が求められ、市場化が進んだ。ソーシャルワークには保健医療領域のサービスとの同化を進行する一方で、財政上の効率性が求められた訳である。

この「市場化」「効率化」に直目したソーシャルワーカー達の状況は、「科学性を確立する事」と「細やかなケアを提供する事」の間に横たわる緊張関係を経験したと<sup>2</sup>も表現されている。

このようないわばソーシャルワークのアイデンティティの危機に際し「ポストモダン哲学・多文化主義・フェミニズム等の諸理論が提起した、人びとの「差異」や「多様性」を尊重すべしという主張は、ソーシャルワークに全面的に受容された<sup>3</sup>。」との記述も見られ、今やソーシャルワークのアイデンティティ、「価値と倫理」の問題に、多くの関心が集まっている<sup>4</sup>という。

### 2. 概念規定の難しさ

国際ソーシャルワーカー協会は「ソーシャルワーク専門職は・・・人権と社会正義の原理は、ソーシャルワークの拠り所とする基盤である。」とソーシャルワークを定義し、この永い定義の後 4 項の説明に加え、\*（注）として「21 世紀のソーシャルワークは、動的で発展的であり、従って、どんな定義によっても、余すところなくすべてを言いつくすことはできないといっようであろう。」としている。

副田は 2007 年「看護や介護・・・そのアイデンティティは関係者のあいだで自明・・・。ソーシャルワークにおいては、その方法論だけでなくそのアイデンティティがたえず論議されてきたし、現在もなお、問われている<sup>5</sup>。」とし、その理由をソーシャルワーカーは多分野に於いて多様な働き方をし、国家政策の動向により「目的範囲が変化せざるを得ない福祉国家以降の我々の立場」等と挙げている。

### 3. 先人の概念規定に関連して

仲村優一は社会福祉の仕事は「一般対策の手の及ばない所に援助の手を差し伸べるという性格を持っている<sup>6</sup>」としてそれを仮に「補充性」と表現し、一番力瀬康子は社会的文化的な欲求の実現を含む幸せな生活のための社会的努力が社会福祉であるとし、さらに「今ある制度としての社会福祉だけに目を向けるのではなく、・・・文化としての福祉の在り方<sup>7</sup>」を問題にしている。

これら論点は社会福祉の仕事や対象領域は、個人の生活問題である所から、社会福祉法体系ばかりでなく現実の生活問題解決の為に動員される諸法制度を含まざるを得ず、さらに目的概念と言う「あるべき解決」「あるべき法制度」を視野に入れている事を示すと思われる。

岡村重夫は「社会福祉の限定」が求められるべき「福祉国家」の段階においても「『法律による社会福祉』に欠陥があれば、『自発的社会福祉』すなわち『相互扶助』や『慈善事業』や『博愛事業』の活動によって、その欠陥の修正が行われたり、『法律による社会福祉』の限界を補完する事も可能にならねばならない<sup>8</sup>」と、法律による社会福祉の限界に目を向けている。

また三浦文夫は、制度論的アプローチと実践論的アプローチの違いについて「その対象把握、社会福祉の主体は何かに於いても鋭く対立しているが、実践（援助技術）に社会福祉の本質があるのか、政策にあるのかと二者択一の問題では無い<sup>9</sup>」としている。

今となれば本質論争はマルクス主義的な発達史観を前提にした社会福祉の対象把握、概念規定を求める側と、社会福祉援助（ソーシャルワーク）の対象者の多様性を前提に、援助過程、方法、対象把握の精緻を求めつつそれに対応せんとする側との論争と理解できよう。

そして生活問題（対象）に接近する方法論としてのソーシャルワークは、生活問題の解決へ向かう援助の過程、その個人の苦しみを媒介にして「在るべき解決」「あるべき法制度」へと架橋する技術として理解できよう。

#### 4. 岡村重夫の主体的側面の実現—社会福祉の機能、目的、対象

岡村は国家政策を形作っている諸制度は、それなりの影響を個人の生活に対して与えるが、専門的分化した側から、個々の生活主体である個人の生活の一部面にしかかかわる事が出来ないものとして、この関係を「制度的側面」または「客体的側面<sup>10</sup>」としている。

一方個人は「ひとりの生活主体者としてこれらを統合し、調和させながら、それぞれの社会的な関係の維持に必要な役割を、自分の生活行為として実行してゆく」のであり、専門分業制度の視点では捉える事の出来ない生活部分を抱えており、この側面を「主体的側面<sup>11</sup>」「個人的側面」としている。社会福祉はこの主体的側面を実現する事を職業的な対象とし、目的とし、制度と個人の間を媒介する機能を有しているとする。

岡村が指摘した事は、近代国家システム（国、地方政府等の政策）は、人々の生活上の問題を通時的（時代を越えて）に完全に覆い完全に解決する事ができない構造にある事、個人の生活にはそれ自体近現代の国家システムに覆われきれない内容がある事を示していると考えられる。

さらに激動のグローバリゼーションの世界経済下、大きな社会環境の変化が繰り返される中で、両者の不具合は次々に生起するであろう事が予測される。

#### 5. 近代主義的思考、その傾向について

ところで近代を育んだルネッサンス以前、カトリック教会内部は当時の叡智の粋が結集する学問、文化の頂点であった。当時のキリスト教会では、近代科学はもう一つのバイブルである自然を読み解く学問としてその芽を胚胎したと言う。天体の運動の秩序、力学的整合性を読み解く事は、神の作り給うた自然の調和、ユニヴァースを読み解く事であり、神の技の妙なることを愛でる作業であった。それゆえ自然科学の法則は、シンプルであればある程、遍く地上にゆき渡ればゆき渡る程、その法則性こそが神の恩寵、その確信そのものであった<sup>12</sup>という。

法学の世界では、市民革命の時代、19世紀的近代市民社会は自由な市民の私的自治を最大の価値とする近代市民法的秩序に覆われる。「個人の意思を極端なまでに重んずる意思主義」「個人の意思だけに純化された契約像<sup>13</sup>」とも表現される、意思だけに契約効果の根拠を求める契約原理が支持される。この合理的な事理弁識能力ある市民像は中世的身分社会を越える価値を体現し、封建領主や聖職者に何を求められたとしても、一市民の内心の意思が全てに優先するとなした。

しかしこの理想的市民の内心の意志に至上の価値をおく近代契約法理は、現世を生き抜く様々な境遇の「生身の人間」を捨象した上で抽象的市民、理想的市民を構成するものであった。

経済活動を科学する経済学においても、「自己利益の最大化を求めて合理的に判断する経済人」ホモ・エコノミカスという人間像をもって多様な人間を抽象し、経済活動の予測や評価に適用される人間行動をシンプリファイして把握する方法論を踏襲したと思われる。

これらの論理過程において、多くの例外、零れおちる個、代表されざる問題は無視される事となり、この点が近代主義的思考の重大な欠陥と言わなければならないのだろう。

#### 6. ソーシャルワークの育んだ思想と近代主義の間

ところで近代主義の一典型「新厚生経済学」に反対するアマルティア・センの厚生主義批判を読む時、その含意する所は膨大だが、ソーシャルワークの原則的立場との関連で大きく論点を纏めるならば、帰結主義<sup>14</sup>、集計主義<sup>15</sup>、狭隘な人間像<sup>16</sup>の三点ではないだろうか。

帰結主義とは、その事柄が現時点において生じている効用、効果の大小によって善し悪しを判断する所から、相互作用の影響やそれ自体の価値（自由、人間等、潜在能力等）を勘案できない。

集計主義とは複層的な価値体系の重なりの中で動いている事象（社会、経済現象）の把握に際し、一つの切り口「厚生」の中に厚生とは比較不能、通訳不能な概念をも詰め込んで一元的に集計するので、自由、人権、信仰、芸術、所属する社会での立場等の価値の影響を無視する。

また理性的、自律的に生きる個人を理想、普遍的な人間像とする事は、ソーシャルワークにおける対象者像との間で齟齬を来さざるを得ず、更にその目的概念の中心に据えるならば、そこから零れおちる多様な境遇（障碍、病弱、貧困等）と価値観をもって生きる人々を捨象する事になり、多様性を前提とするソーシャルワークの原則とは対立的であろう。ソーシャルワークが実践的に育んだ思想、対象者理解は近代的思考に反対するセンの批判的立場と双方向的であった。

## 7. グローバリゼーション経済下の生活問題について

3.11以降、日本社会は保護率、そして貧困率の国の調査（一時期行われず）も増大傾向であり、被災地地価のマイナス評価<sup>17</sup>が示すような一次産業（農業、漁業）への影響があり、第二次産業では生産工場の海外移転の動向から、労働市場全体に変化を来している。国民の健康問題、貧困の拡大が予測される中、現下の最も重大な課題は実効性ある救貧、防貧の機能を中軸に据えた社会保障制度の構築であろう。再度貧困研究の現段階アマルティア・センの貧困測度<sup>18</sup>を読み解く。

<p><b>センの貧困測度</b> : <math display="block">P \text{ (貧困の度合い)} = \frac{H(I+(1-I) \times \text{貧困者内部のジニ関数})}{H \text{ (貧困率)} + H(1-I) \times \text{貧困者内部のジニ関数}}</math></p> <p><math display="block">H \text{ (貧困率)} : \frac{H}{H} \text{ (貧困線以下の人数 / 全人口数)}</math></p> <p><math display="block">I \text{ (ギャップ比率)} : \frac{I}{I} \text{ (貧困線 - 貧困者所得の平均 / 貧困線)}</math></p>
---

前項 HI は、個人の所得額から導かれる貧困の広がりや深さ、絶対的貧困を表し、後項は均等分割線を貧困線とするジニ関数を抱えるので、貧困線水準という他者との比較において問題となる不平等、格差問題としての相対的貧困を表している。上記の式は、貧困とは絶対的貧困と相対的貧困を併せ持つ社会状態であり、後項は社会の貧困率や貧困ギャップ比率、貧困者のジニ関数の動向によって伸縮し、モジュール的に絶対的貧困を覆いあるいは露出させる事を示している。

この構造をふまれば、有効な貧困対策は絶対的貧困に対応する所得保障や生活財支給と、相対的貧困に対応する対人諸サービス（医療介護、就労支援、教育保育等）とが混然一体同時実施が望まれる。この対人サービス群と所得保障制度の統合システムたる社会保障制度において、当事者の個別的ニーズを聞き取り、制度と個人を繋ぐソーシャルワーク相談が必要不可欠である。

## 8. 生活問題に係わる全ての社会制度の過不足を実践的に顕らかにするソーシャルワーク

ソーシャルワークは、近代国家システムの成立過程で起こった貧困都市生活者への友愛訪問がルーツであった。当初から近代国家政策にカバーされない個人の生活問題に対峙してその解決を図り、完全には果たせない解決を前に、より良い解決を目的概念として抱きつつ、日々の仕事を進めてきた集団がソーシャルワーカーと言えるのかもしれない。我々の誕生の機縁、出自こそが我々の専門性を示していると思われる。

他職種との間で我々の固有性を提示せんとして一つの正しい価値を掲げれば、結果としてそれ以外の価値の否定状況を現出するであろう。我々の固有性は一つの価値を掲げるのではなく、近現代の国家システムと人間生活の間のズレ、間隙などに生じる生活問題に対して、制度の内外から可能な努力を、利用者の生活世界の固有性に於いて展開する事であろう。

社会制度によっても解決できない生活問題構造を言語化し、解決の為に制度を使い尽した上で顕在化する「時代遅れな制度」「必要な制度」を彫り起こす、終わりなき実践と言うべきであろうか。激動の時代にこそ我々の目的概念は磨かれざるを得ないのであり、我々は日々変化を迫られつつある。社会福祉は個々の生活問題に寄り添い、共感的に受け止められた生活問題と近代国家システムの間での陥落部分、悲惨な部分をも根拠として、さまざまな脱近代の思想に学びつつ、ソーシャルワークの原則において近現代国家システムを脱構築、再構築を引き出す実践といえよう。

<sup>1</sup> <http://members3.jcom.home.ne.jp/asoeda/Pdf/identity%20of%20social%20work.pdf>  
P8 2012/0731

<sup>2</sup> <http://repository.osakafu-u.ac.jp/dspace/bitstream/10466/12496/1/2011000121.pdf>  
12(P25) 2012/07/31

<sup>3</sup> 同上 4(P17) 2012/07/31

<sup>4</sup> 同上 2(P15)

<sup>5</sup> <http://members3.jcom.home.ne.jp/asoeda/Pdf/identity%20of%20social%20work.pdf>

---

P1-2 2012/0731

- 6 仲村優一 『社会福祉』 P33 放送大学教育振興会 1994年8月
- 7 一番ヶ瀬康子 『新・社会福祉とは何か』 P208 ミネルヴァ書房 2007年5月
- 8 岡村重夫 『社会福祉原論』 P67 全国社会福祉協議会 昭和63年12月
- 9 三浦文夫 『社会福祉通論 30講』 P39 光生館 2003年3月
- 10 岡村重夫 『社会福祉原論』 P88-89 全国社会福祉協議会 昭和63年12月
- 11 同上
- 12 渡辺正雄 『科学者とキリスト教』 P17 ブルーバックス B-686 講談社 昭和62年4月20日  
注) 桜井登 科学的世界観 2節科学と宗教「自然科学においては、宇宙は秩序だったもので、その構造や法則は最終的には簡明であるべきであると考えられている。」  
<http://www.geocities.jp/nbsakurai/32.htm> 07/20/20
- 13 内田貴『契約の時代』 P29 岩波書店 2000年11月
- 14 絵所秀紀・山崎幸治『アマルティア・センの世界』 P17~19 晃洋書房 2004年5月
- 15 鈴木興太郎 後藤玲子『アマルティア・センー経済学と倫理学』 P157 実教出版 2002年2月
- 16 アマルティア・セン 池本幸生・野上裕生・佐藤仁訳 『不平等の再検討』 P1  
岩波書店 1999年7月
- 17 河北新報ニュース 2011年11月02日(水曜日) 路線価調整率公表
- 18 鈴木興太郎 後藤玲子『アマルティア・センー経済学と倫理学』 P225 実教出版 2002年2月